

# ニセアカシアの駆除と利用をめぐる

前河 正昭

ニセアカシアは北米原産ですが、長野県に特に多い外来樹木です。環境省は2005年に要注意外来生物のリストを選定し、多くの緑化植物とともにニセアカシアもそのリストに入りました。この頃からニセアカシアの駆除の是非については様々な場面で議論され始めています。ここではニセアカシアの駆除を伴う公共事業の県内で代表的なものについていくつか紹介します。

## 牛伏川の林相転換事業

明治の頃、牛伏川の砂防は下流の信濃川の治水対策の中でも重要な課題であり、内務省土木局により1889年から砂防工事が行われていました。山腹緑化でニセアカシアを少量使用したところ、1970年代にはほぼ全山がニセアカシア林になりましたが、その後、倒伏、根返りや小規模の崩壊が目立つようになりました。そこでニセアカシアの林をコナラなどの在来樹種の林に二次緑化をすることになりました。これが県の林相転換事業のはじまりです。第一期の事業（1996～2004年度）では、斜面の上下方向で帯状択伐を行いました。すなわち、15mの幅でニセアカシアの除伐を行い、既に在来の高木種が生育している所はそのまま残して、高木種が定着していないところには高木種の苗を補植したのです。この事業は運悪く、ちょうど牛伏川でニホンジカの密度が増加していく時期とも重なり、シカの食害により森林の保育があまりうまくいきませんでした。第二期の事業では第一期の結果をふまえ、大幅に施業方針が変更されました。大きな変更点は、1) 集材の困難な場所では伐採ではなく巻き枯らしを行うことや、2) シカの食害をあらかじめ想定し無理に樹木の植栽は行わないことなどです。この事業で牛伏川にどんな森林ができるのか、まだ未知数な部分も多いですが、源流域に残存するニセアカシアを除去し、下流への分布拡大のリスクを軽減するという点で、この林相転換事業は重要な意味を持っています。

## 千曲川の公募伐採

現在千曲川では、河川内陸地の実に25%をニセアカシア林が占めており（H16 河川水辺の国勢調査より）、河川事務所により伐採が進められています。な

お、今となつては実証不可能ですが、これらのニセアカシアの分布拡大の起源の一つは、はるか上流の牛伏川の砂防緑化かもしれないのです。河道内の樹木が多すぎるため洪水時に流下能力不足になる。河川の見回りの際に見通しが悪くなる。林分そのものが不法投棄の温床になってしまう。根が侵入して堤防の管理にも都合が悪い。根が浅く容易に流木化し橋脚に引っ掛かかる。このように河川管理上の理由が様々にあり伐採されています。河川事務所では伐採のボランティアを一般市民から公募していますが、年々、希望者は増えているそうです。薪ストーブの燃料などで人気があるためです。なお、昭和40年代には、河川敷内は入会地として利用され地域住民によってニセアカシアは定期的に伐採されていたという情報もありますから、これは少し昔の状態に戻ったという見方もできます。ただし、昔と違い、切り株に除草剤の塗布を行い、その場から完全に駆除する方針も一部で採られています。

## これからの課題

ニセアカシアは河川の防災管理や外来種管理の観点からは、やはり駆除ないし分布拡大を抑制しなくてはならない樹木のようなようです。しかし、県内の養蜂業では千曲川などの大規模河川に広がるニセアカシア林を主な採蜜場所に利用してきたという歴史性もあります。河川敷の平地林は容易にアクセスでき、作業がしやすいためです。河川でのニセアカシアの除去が進めば、将来的には山間部のニセアカシア林に採蜜場所を分散させたり、代替蜜源を確保する必要性も出てくるかもしれません。ニセアカシアの管理を考える上で、私は養蜂業との合意形成についてもなんらかの研究支援を進めたいと考えています。

（まえかわ まさあき／自然環境部）



山間部に広がるニセアカシア林